

(19)日本国特許庁 (JP)

(12) 公開特許公報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開平11-17402

(43)公開日 平成11年(1999)1月22日

(51)Int.Cl.⁶
H 01 P 1/161
1/17
1/213
H 01 Q 13/06
21/30

識別記号
F I
H 01 P 1/161
1/17
1/213
H 01 Q 13/06
21/30

D

審査請求 未請求 請求項の数27 OL (全8頁) 最終頁に続く

(21)出願番号 特願平10-140013

(22)出願日 平成10年(1998)5月21日

(31)優先権主張番号 97 06172

(32)優先日 1997年5月21日

(33)優先権主張国 フランス (FR)

(71)出願人 391030332

アルカテル・アルストム・コンパニイ・ジ
エネラル・デレクトリシテ
ALCATEL ALSTHOM COM
PAGNIE GENERALE D'E
LECTRICITE
フランス国、75008 パリ、リュ・ラ・ボ
エティ 54

(72)発明者 アレクシー・カムニ

フランス国、31410・サン-イレール、
ル・ガラン (番地なし)

(74)代理人 弁理士 川口 義雄 (外1名)

最終頁に続く

(54)【発明の名称】マイクロ波送受信用のアンテナ源

(57)【要約】

【課題】広い周波数帯域で使用できる周波数が受信信号の周波数とは異なる送信信号を受信信号から分離するトランステューサを含む偏波マイクロ波の送受信用アンテナ源を提供すること。

【解決手段】トランステューサおよびアンテナの放射エレメントの接続によって放射エレメントが受信した信号および前記放射エレメントに送信される信号の偏波状態が保持される。トランステューサは一端が放射エレメントに接続され、他端が送信経路に接続され、受信信号をウェーブガイドの側面によって伝送する方形断面ウェーブガイドを含む。このアンテナ源によって拡張C帯域で、すなわち、受信帯域が3.4GHz～4.2GHz、送信帯域が5.85GHz～6.65GHzでの送受信が可能になる。

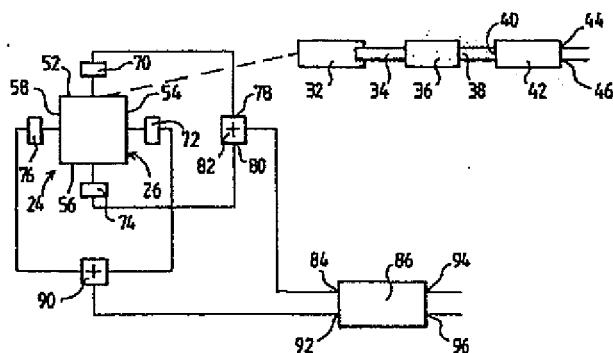


FIG.2

【特許請求の範囲】

【請求項1】 周波数が受信信号の周波数とは異なる送信信号を受信信号から分離するトランステューサを含むマイクロ波の送受信用アンテナ源であって、トランステューサが方形断面ウェーブガイドを含み、ウェーブガイドの一方の端部が放射エレメントに接続され、他方の端部が方形断面ウェーブガイド内部で終端する円形断面ウェーブガイドを含む送信経路に接続されているアンテナ源。

【請求項2】 周波数が受信信号の周波数とは異なる送信信号を受信信号から分離するトランステューサを含むマイクロ波の送受信用アンテナ源であって、トランステューサが伝搬方向に垂直に延びるリブまたはコルゲーションを備えたウェーブガイドを含み、前記ウェーブガイドの一方の端部が放射エレメントに接続され、他方の端部が前記ウェーブガイド内部で終端する円形断面ウェーブガイドを介して送信経路に接続されるアンテナ源。

【請求項3】 リブまたはコルゲーションを備えたトランステューサのウェーブガイドの断面が円形である請求項2に記載のアンテナ源。

【請求項4】 受信信号がトランステューサのウェーブガイドの側面によって伝送される請求項1に記載のアンテナ源。

【請求項5】 受信経路が伝搬方向に対して横断方向に細長いアーチャまたはスロットを介してトランステューサのウェーブガイドの側面に接続されたウェーブガイドを含む請求項1に記載のアンテナ源。

【請求項6】 送信経路が、送信周波数の信号を通過させ、受信周波数の信号を反射するフィルタ手段を介してトランステューサのウェーブガイドに接続されている請求項1に記載のアンテナ源。

【請求項7】 送信経路のウェーブガイドが、例えばトランステューサのウェーブガイド内部にある二つのスロット形状のしづりを備えた請求項1に記載のアンテナ源。

【請求項8】 フィルタ手段がトランステューサのウェーブガイド内部にあるリングを含む請求項6に記載のアンテナ源。

【請求項9】 トランステューサおよびアンテナの放射エレメントの接続が、放射エレメントが受信した信号および前記放射エレメントに送信される信号の偏波状態を保持するようなものである請求項1に記載のアンテナ源。

【請求項10】 トランステューサのウェーブガイドの二つの対する側面がマジックTなどの加算回路の二つの入口に接続され、トランステューサのウェーブガイドのその他の対する側面がマジックTなどの第二の加算回路の二つの入口に接続され、二つの加算回路の出口が相互に直交する直線偏波を備えた信号を送信する請求項9に記載のアンテナ源。

【請求項11】 直線偏波信号を円偏波信号に変形する偏波器を受信経路に含む請求項9に記載のアンテナ源。

【請求項12】 偏波器が、例えば「リプレット」タイプの3dB/90°タイプのカプラを含む請求項11に記載のアンテナ源。

【請求項13】 3dB/90°タイプのカプラが、二つの矩形の断面を持つウェーブガイドを含み、ウェーブガイドの断面の短辺と高さが等しくウェーブガイドの断面の長辺の二倍の幅の矩形の接合ゾーンでウェーブガイドの入口分岐および出口分岐が共に接続されており、前記接合ゾーンの天井を形成する壁と床を形成する壁の少なくとも一つが信号波伝搬方向Yに対して横断方向に延びる内側に向かう突起部を備える請求項12に記載のアンテナ源。

【請求項14】 突起部が、接合ゾーンの対応する壁の大部分の領域を占める底面と、寸法が大幅に小さい自由端部または頂上とを有する請求項13に記載のアンテナ源。

【請求項15】 突起部の頂上が接合ゾーンの中央位置を占める請求項11に記載のアンテナ源。

【請求項16】 突起部が二つのウェーブガイドの入口分岐と出口分岐に向けられたりブに固定されている請求項13に記載のアンテナ源。

【請求項17】 リブが突起部とほぼ同じ高さである請求項16に記載のアンテナ源。

【請求項18】 それぞれのリブがウェーブガイド分岐に入り込み、分岐に入り込んでいる端部の高さが接合部から分岐に向かって次第に減少する請求項16に記載のアンテナ源。

【請求項19】 第一のウェーブガイドに向けられた複数のリブが第一のウェーブガイドに向けられた突起部の第一の端部を介して突起部の頂上経由で共に接続され、第二のウェーブガイドの入口分岐および出口分岐に向けられた複数のリブが突起部の第二の端部を介して突起部の頂上経由で共に接続される請求項16に記載のアンテナ源。

【請求項20】 カプラの接合ゾーンに出力信号間の結合を調整する調整手段が設けられた請求項13に記載のアンテナ源。

【請求項21】 送信経路内に直線偏波信号を右円偏波信号と左円偏波信号に変形するseptum(セプタム)タイプの偏波器が設けられた請求項1に記載のアンテナ源。

【請求項22】 偏波器が、円形断面の出口ウェーブガイドに共に接続された二つの半円形断面の入口ウェーブガイドを備えており、出口ウェーブガイドが入口ウェーブガイドに接続されている相互接続ゾーンから延びる軸方向の分離壁を有しており、入口ウェーブガイドが出口ウェーブガイドの出口に向かって前記壁の高さが段階的に減少するゾーンで終端されている請求項21に記載の

アンテナ源。

【請求項23】 偏波器の通過帯域が壁の端部の段数を適切に選択することで調整される請求項22に記載のアンテナ源。

【請求項24】 それぞれの段の軸方向の長さが等しくない請求項22に記載のアンテナ源。

【請求項25】 それぞれの段の径方向の高さが等しくない請求項22に記載のアンテナ源。

【請求項26】 3.4GHz～4.2GHzの範囲の帯域で信号を受信する請求項1に記載のアンテナ源の使用法。

【請求項27】 5.85GHz～6.65GHzの範囲の周波数を持つ信号を送信する請求項1に記載のアンテナ源の使用法。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】 本発明は偏波されたマイクロ波の送受信用のアンテナ源に関する。

【0002】

【従来の技術】 大量の情報を無線信号で送信するには高い搬送周波数と共に広帯域偏波信号を使用することが好ましいことが知られている。

【0003】 さらに、同じアンテナで信号の送信と受信を行う場合、送信周波数帯域を受信周波数帯域と別に設定することが必要である。

【0004】 電気通信のトラフィック量は常に増加傾向にあり、これは送信および受信周波数帯域がますます拡張されていることを意味する。例えば、現在一部の衛星通信に使用されているC帯域は受信帯域が3.625GHz～4.2GHzで送信帯域が5.85GHz～6.425GHzであるが、受信帯域が下方向に拡張され(3.4GHz～4.2GHz)、送信帯域が上方向に拡張されている(5.85GHz～6.65GHz)。

【0005】 図1は従来のC帯域で送受信信号用に使用できる、すなわち、送信および受信用の575MHzの帯域幅を備えたアンテナ源を示す図である。この知られているアンテナ源は、第一に受信信号を円偏波信号から直線偏波信号へ変換し、第二に送信する信号を直線偏波信号から円偏波信号へ変換する偏波器16に整合部12および円形断面ウェーブガイド14経由で接続されるホーン10などの放射エレメントを含む。

【0006】 偏波器16は送信周波数を受信周波数から分離するトランスデューサ18に接続される。トランスデューサは外部表面が長手方向に延びたスロットを備えた円形断面ウェーブガイド(すなわち、その長い寸法がウェーブガイドの軸に平行)を備え、他のウェーブガイド(図示せず)や送信周波数を遮断して受信周波数を通過させるフィルタ手段(図示せず)に接続される。偏波器16に接続された側と反対側のトランスデューサ18のウェーブガイドの端は送信する信号を受信する。送信

経路は受信周波数を遮断するフィルタ手段を含み、一般に直交偏波手段も含む。

【0007】

【発明が解決しようとする課題】 この種のアンテナ源は、広帯域信号、特に上記の拡張C帯域の広帯域信号の送受信に十分な結果を示していないことが判明している。

【0008】 本発明の目的は、上記の欠点を克服することである。

【0009】

【課題を解決するための手段】 本発明のアンテナ源では、広帯域信号の送受信を行うため、受信信号から送信信号を分離するトランスデューサは、方向に対して垂直方向に伸びているリブまたはコルゲーション(corrugation)を備えた方形断面ウェーブガイド、あるいは円形断面または方形断面(またはその他の断面)ウェーブガイドを含む。

【0010】 好ましい実施形態によれば、トランスデューサはトランスデューサのウェーブガイドに入り込んだ円形断面のウェーブガイドによって送信経路に接続される。この構成で送信信号と受信信号の分離が最適化される。例えば二つのスロットの形態のしづりがトランスデューサのウェーブガイド内部の円形ウェーブガイドの先端にある場合には、分離はさらに向上する。

【0011】 トランスデューサが方形断面ウェーブガイドを含む場合、その各面には長い辺がウェーブガイドの軸に有利には垂直な矩形のアーチチャまたはスロットが設けられるのが有利である。このスロットによって受信信号を抽出することができる。すなわち、これらのスロットは送信周波数を遮断するフィルタ手段に関連付けられている。

【0012】 本発明の好ましい実施形態では、放射エレメントおよび送信周波数を受信周波数から分離するトランスデューサの接続は、それが伝送する信号の偏波状態を保持するようなものである。

【0013】 このケースで、送信または受信信号の偏波状態が変換される(円偏波から直線偏波または直線偏波から円偏波へ)場合には、送信経路または受信経路あるいはその両方に対応する偏波器がトランスデューサの放射エレメントと反対側の端に設置される。この構成も広い送信帯域および広い受信帯域での動作を容易にする。

【0014】 スロットが設置されたトランスデューサのウェーブガイドから受信信号を抽出することが可能など、一実施形態では二つの相対する面のスロットは「マジックT」タイプの加算器のそれぞれの入口に接続される。受信信号が円偏波の場合、各加算器の出口は規定の方向に直線的な偏波を有する受信信号を送信し、二つのマジックTの出力は偏波ベクトルが相互に垂直である信号である。

【0015】 送信源での右および左円偏波を特徴とする

直交直線偏波を備えた信号を変形するため、3 dB/90°のカプラ、特に「リブレット」タイプのカプラが有利に使用される。この種のカプラは矩形の接合ゾーン内で接続され、それぞれが接合ゾーンに導く入口分岐と接合ゾーンの外に導く出口分岐を備えた二つの矩形断面のウェーブガイドを含む。接合ゾーンの高さは各ウェーブガイドのそれぞれの断面の短辺に等しく、接合ゾーンの幅は前記断面の長辺の二倍に等しい。一般に、出口分岐の信号の振幅に合わせるため、接合ゾーン内部の大きい壁から突き出している突起部が少なくとも一つ設けられる。

【0016】本発明の別の構成では、カプラが実行する偏波分離を最適化するため、すなわち、90°に位相分離され、振幅が等しい例えば0.1 dB以内の信号を広周波数帯域にわたって受信するため、少なくとも一つの大きい壁面に、接合ゾーンが伝搬方向に対して横断的に延びている「横断」方向に伸長した突起部を備えたこの種のカプラが用いられる。

【0017】知られているリブレットカプラでは、接合ゾーン内の該当する突起部は円形であるかまたは長手方向に細長い。

【0018】横断方向に細長い突起部があることで、知られているカプラよりもかなり良い結果が得られる、すなわち、より広い周波数帯域で出力信号の振幅が一致する。

【0019】突起部がウェーブガイドの分岐のそれぞれに向けられた好ましくは各分岐内で次第に高さが減少するリブによって延長される場合、さらに良い結果が得られる。

【0020】送信時に直線偏波信号に基づいて右円偏波信号または左円偏波信号あるいはその両方を送信する必要がある場合、直交直線偏波の送信信号を受信するデュプレクサと、直線偏波信号を円偏波信号に変形する偏波器が用いられる。

【0021】デュプレクサと偏波器の機能を組み合わせた「septum (セプタム)」タイプの偏波器を使用することもできる。この種の偏波器は直線偏波信号を受信し、円形断面出口側ウェーブガイドに向かって収束する半円形断面のウェーブガイドを二つ含む。出口側ウェーブガイドでは例えば複数の入口側ウェーブガイドが合流する接合ゾーンから長手方向に延び、径方向に高さが減少する壁又はブレードが設けられる。この壁は出口側ウェーブガイドの軸に沿って延びる。ブレードの高さは次第に、すなわち好ましくは段階的に、すなわち段状に減少する。この種の段によってより良い結果が得られ、段数が偏波器の通過帯域に影響することが判明している。一般に、段数が多ければ多いほど、偏波器の通過帯域は広くなる。

【0022】

【発明の実施の形態】本発明のその他の特徴と利点は以

下の添付図面を参照しながら説明する実施形態のいくつかから明らかになろう。

【0023】図面を参照しながら下記に説明する本発明の実施形態は、拡張C帯域での送受信用のアンテナ源に関する。上述したように、受信周波数は3.4 GHz～4.2 GHzの範囲内に、送信周波数は5.85 GHz～6.65 GHzの範囲内にある。換言すると、受信周波数帯域は800 MHzの幅がある。送信周波数についても同様である。

【0024】図2に示すアンテナ源は方形断面ウェーブガイド26を含み、図中に伝搬軸に垂直方向の断面で示されるトランスデューサ24を示す。ウェーブガイド26の一方の端は伝搬ホーンに直接接続されている(図示せず)。「直接」という用語は、トランスデューサ24が伝搬ホーンにも、またその他の放射メンバにも偏波器を介して接続されていないということを意味する。ただし、接続は偏波器以外の非放射エレメント、例えば、衛星の軌道を追跡する必要があるアンテナのサーボ制御を行うモードエクストラクタを含んでいてもよい。

【0025】ホーンに接続されるウェーブガイド26の端28と反対側の端30(図3)は、方形断面ウェーブガイド34経由で偏波器36が送信する右円偏波送信信号と左円偏波送信信号を受信する円形断面ウェーブガイド32に接続される。

【0026】偏波器36の目的は、直線偏波入力信号を円偏波出力信号に変形することである。したがって、偏波器36の入口38は、それぞれ右円偏波信号と左円偏波信号に変形される直線偏波信号を受信する二つの入口44と46を備えたデュプレクサ42の出口40に接続される。入口44は右円偏波信号に変形される信号を受信し、入口46は左円偏波信号に変形される信号を受信する。

【0027】本発明の好ましい実施形態では、デュプレクサ42および偏波器36は以下に図5および図6を参照しながら説明する「septum (セプタム)」タイプの偏波器を構成する単一のエレメント50を形成する。

【0028】ウェーブガイド26の側面52、54、56、および58には矩形のアーチチャまたはスロットが設けられ、ここに同じ矩形断面の小型のウェーブガイドが接続される。図3に示すように、面52は矩形ウェーブガイド60によって延長される。ウェーブガイド60、62、64、および66はウェーブガイド26の軸xに沿って同じ位置にある。各スロットの長手寸法、したがって、矩形ウェーブガイド60、62、64、および66のそれぞれの長手寸法は軸xに対して垂直であることに注意する必要がある。換言すると、矩形アーチチャは伝搬方向に対して横断方向に延びている。

【0029】ウェーブガイド60、62、64、および66は、送信周波数を遮断し受信周波数を通過させるそ

それぞれフィルタ70、72、74、および76とを備えている(図2)。

【0030】ウェーブガイドの相対する面52および56に関連付けられた矩形ウェーブガイドは「マジックT」82の二つの入口78および80のそれぞれに接続され(図2)、「マジックT」82の出口は3dB/90°タイプのカプラ86の第一の入口84に接続される。

【0031】同様に相対する面54および58に関連付けられた矩形ウェーブガイドは第二の「マジックT」90の入口のそれぞれに接続され、「マジックT」90の出口はカプラ86の第二の入口92に接続される。

【0032】カプラ86は第一の入口を介して第一の方向に直線偏波された信号を受信し、第二の入口を介して直交方向に直線偏波された信号を受信する。これらの信号はアンテナ源の波形の右円偏波成分と左円偏波成分である。カプラは出口94および96のそれぞれで二つの直交する円偏波を表し区別する信号を送信する。例えば、出口94の信号は右円偏波を表し、出口96の信号は左円偏波を表す。この種のカプラの例を図7から図9を参照しながら以下に詳述する。

【0033】送信用と受信用の偏波器を別々に設置することで偏波器を最適化し、拡張C帯域での信号送受信を行うアンテナ源を製作できる。

【0034】ウェーブガイド26の方形断面は、送信帯域および受信帯域を広げる際に役立つ。

【0035】変形例では(図示せず)、ウェーブガイド26の内部面にはコルゲーション、すなわち、軸xに垂直に延びるリブが設けられている。別の変形例では、トランステューサ24がコルゲーションを備えており、そのようなコルゲーションを備えていないウェーブガイドよりも帯域を広げることが可能な円形断面ウェーブガイドを方形断面ウェーブガイド26の代わりに含む。

【0036】次に図3および図4を参照する。

【0037】ウェーブガイド26は方形断面ウェーブガイド26とホーンの円形断面ウェーブガイドの間の遷移として働くウェーブガイド100(図4)に前面28を介して接続される。

【0038】送信経路を接続する円形断面ウェーブガイド32はこの例では十字形の、すなわち、二つの垂直に交わるスロット104および106を含むしぶり102によってウェーブガイド26内で終端する。しぶり102は受信周波数を短絡する。

【0039】しぶり106の裏側に壁30の内側面に接してリング108が設けられている。しぶり102に接続付けられたリング108の目的は、ウェーブガイド26の側壁のスロットに向けて受信信号を反射して受信信号が送信経路内に侵入しないよう防止することである。

【0040】送信経路の円形ウェーブガイド32には5.85GHz～6.65GHzの範囲にわたる送信周

波数のインピーダンス整合のためのリング形式のその他しぶり110、112が設けられている。

【0041】受信経路の矩形断面の小型ウェーブガイドのそれぞれに、例えば、ウェーブガイド60内にしぶり114、116、および118がまた設けられる(図4)。しぶり116および118はそれぞれウェーブガイド60の短辺の内面から突き出している二つの矩形の板またはリブから構成される。しぶり116用の116₁および116₂で示すこれらのリブはウェーブガイド60の大きい面117に垂直である。

【0042】これと対照的に、ウェーブガイド26の対応するスロット(図4には図示せず)に最も近いしぶり114はウェーブガイド60の小さい面に垂直で大きい面117に平行な二枚の板114₁および114₂から構成される。

【0043】しぶり114、116、および118はフィルタ手段を構成し、送信周波数を遮断し受信周波数を通過させることを可能にする。

【0044】次に、図2に示すアンテナの送信経路にあるseptum(セプタム)偏波器を示す図5および図6を参照する。

【0045】septum(セプタム)タイプの偏波器50は二つの入口側ウェーブガイド130および132を含む。入口44はウェーブガイド130の端に位置し、入口46はウェーブガイド132の端に位置している(図2および図6)。入口付近では、ウェーブガイドの断面は矩形であるがその先では半円形である。

【0046】二つのウェーブガイド130および132は、半円形ウェーブガイド130および132のそれぞれの断面の直径に等しい直径を持つ円形断面ウェーブガイド134に連続的に接続される。ウェーブガイド134では、例えばウェーブガイド130および132が共に接続される相互接続ゾーンから平面がウェーブガイド134の軸を含む中央の壁すなわちブレード136が設けられる。ウェーブガイド130および132が共に接続される相互接続ゾーンでは、中央の壁の径方向の高さはウェーブガイド134の内径に等しい。出口ゾーン138に向かって壁136の幅は段階的に減少する、すなわち、端部断面に段が設けられる。図示の例では、140、142、144、および146の四つの各段が提供される。

【0047】直線偏波信号は入口44および46に入力され、これらの信号は出口150で円偏波信号に変形される。入口44に入力された信号は右円偏波信号に、入口46に入力された信号は左円偏波信号に変形される。

【0048】拡張C帯域では、円偏波の品質、すなわち、その楕円率は端138の切り取り方、特に段数および長さ(軸方向)および各段の高さ(径方向)によって変化する。特に、段数が増えれば増えるほど偏波器の通過帯域は広がることが認められている。段の長さと

高さは等しくないことにも注意すべきである。

【0049】受信経路のカプラ86の実施形態を示す図7から図9を参照する。知られている方法では、「リブレット」タイプの3dB/90°のカプラ(図2)は、入口84に入力された信号は出口94および96で等しい振幅の二つの信号の形式で伝送され、出力信号は相互に90°位相がずれているようなものである。同様に、第二の入口92に入力された信号は出口94および96で等しい振幅の二つの信号の形式で伝送され、出力信号間に90°の位相ずれを伴う。

【0050】この種のカプラは接合ゾーン164と共に接続される二つのウェーブガイド160および162を含む。これらのウェーブガイドの断面は矩形で、断面の短辺に対応する小さい面166および168が隣接し、接合ゾーン164で前記面または壁が省略されるように配設されている。

【0051】接合ゾーンは床を形成する壁170および天井を形成する壁172を備える(図8)。これらの壁のそれぞれの幅、すなわち、伝搬方向Yに垂直でウェーブガイド160および162の大きい面に平行な寸法は、各ウェーブガイド160、162の矩形断面の最大寸法の二倍に等しい。接合ゾーンの高さ、すなわち、壁170と172の間の距離はウェーブガイド160および162の断面の短辺に等しい。

【0052】床を形成する壁170には、底面176が伝搬方向Yを横断して伸びた曲線形状の突起部174が設けられる(図7)。突起部174の底面176は床170の面積の大部分(約75%)を占有する。突起部174の頂上178の寸法は底面176の寸法よりかなり小さい。頂上は伝搬方向Yに対して横断方向に伸長している。突起部の底面および頂上は接合ゾーン164に関して中心にある。

【0053】突起部174はそれぞれ180、182、184、および186のリブで延長される。簡素化のためにリブの一つだけ(参照されたリブ180)を記述する。他のリブは類似している。

【0054】リブ180は床170に垂直な壁で構成される。接合ゾーン164内のリブ180の高さは突起部174の高さと同じである。リブ180はウェーブガイド160の入口分岐160₁に向けられ、部分的に前記分岐160₁に進入する。その高さは前記分岐内で次第に減少する。換言すると、リブ180の端部は楔またはペベル190の形状である。ペベル190の反対側の端で、リブ180はウェーブガイド160に向いた突起部170の頂上178の端部192に接続される。

【0055】リブ184はウェーブガイド160の出口分岐160₂に向けられる。リブ182はウェーブガイド162の入口分岐162₁に向けられ、リブ186は同じウェーブガイド162の出口分岐162₂に向けられる。リブ182および186は残りのリブ180およ

び184が共に接続されている端部192から離れた突起部の頂上178の端部194を介して共に接続されている。

【0056】天井172のエッジ198の付近に調整ねじ196がある。もう一つ別の調整ねじ200が天井の中央にある。これらのねじで出力波の間の結合の調整、すなわち、信号波の相対振幅の調整が可能になる。

【0057】信号伝搬方向Yに対して横断方向に延びている突起部174によって出力信号の振幅が広周波数帯域にわたり、また800MHz幅の受信C帯域にわたってあらゆる場合に、0.1dB以内の誤差で一致させることができるとなることが判明している。リブ180、182、184、および186は所望の帯域幅でカプラの品質をさらに大幅に向上させる。

【0058】ゾーン164の寸法は従来のリブレットカプラの対応するゾーンの寸法と同じオーダーである。知られている方法で、カプラのプロパティはTE₁₀およびTE₂₀モードが接合ゾーン164内で共存するという事実から生じる。

【0059】しかし本発明によってTE₁₀モードはU形のTE₁₀モードに変形され、より安定して導かれた波長λ_c及びUの寸法に関連するより広い動作帯域がもたらされる。

【0060】図9の実施形態では、接合ゾーン164の天井172に突起部174に類似しかつ突起部174に関連付けられた対応するリブに類似した四つのリブによって延長される突起部210が設けられる。突起部210およびそれに関連付けられたリブの寸法および配置は、突起部174およびそれに対応するリブの寸法および配置と同じである。

【0061】変形例では、突起部174と任意選択で突起部210は連続するエレメントで構成されず、相互に近接していて連続する突起部として同じ結果をもたらすスタッドのようなそれぞれの突起部のセットで構成される。

【0062】変形例では、偏波器86は省略され、受信信号は直線偏波で使用される。したがって受信信号はマジックT82および90の出口で回復される。

【0063】同様に、変形例においては、送信に関してデュプレクサ42だけが設けられ、偏波器36は設けられず、送信は直交直線偏波信号で実行される。

【0064】送信時にデュプレクサおよび90°回転させた偏波器を使用して、伝送を直交直線偏波を有する信号で実行することもできる。

【0065】さらに別の変形例では、上記の例で示した四つのアクセス(二つの送信アクセスと二つの受信アクセス)未満のいくつかのアクセスを備えたアンテナ源が提供される。この場合、未使用のアクセスはロードされる。

【0066】以上、説明してきたアンテナ源は1メート

ル～32メートルまたはそれ以上の範囲の直径を備えた電気通信用アンテナに特に適用できる。

【図面の簡単な説明】

【図1】従来の技術を示す図である。

【図2】本発明のアンテナ源の全体を示すブロック図である。

【図3】図2のアンテナ源の一部であるトランスデューサを示す透視図である。

【図4】図3に示すトランスデューサの内部を示す透視図である。

【図5】図2に示すアンテナ源の送信経路に使用される偏波器の断面図である。

【図6】図5の線分6-6の断面図である。

【図7】図2に示すアンテナ源の受信経路の偏波器として使用される3dB/90°カプラ内部を示す図である。

【図8】図7に示すカプラを矢印fの方向に見た図である。

【図9】変形例における図8と同様の図である。

【符号の説明】

10 ホーン

12 固定部

14、32 円形断面ウェーブガイド

16、36 偏波器

18、24 トランスデューサ

26 方形断面ウェーブガイド

42 デュプレクサ

60、62、64、66、100、134、160、1

62 ウェーブガイド

72、74、76 フィルタ

82、90 「マジックT」

86 3dB/90°タイプのカプラ

102、110、112、114、116、118 し
ぼり

104、106 スロット

108 リング

114₁、114₂ 板

116₁、116₂ リブ

130、132 入口側ウェーブガイド

136、170、172 壁

138 出口ゾーン

140、142、144、146 段

150 出口

【図1】

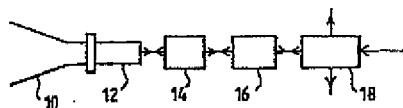
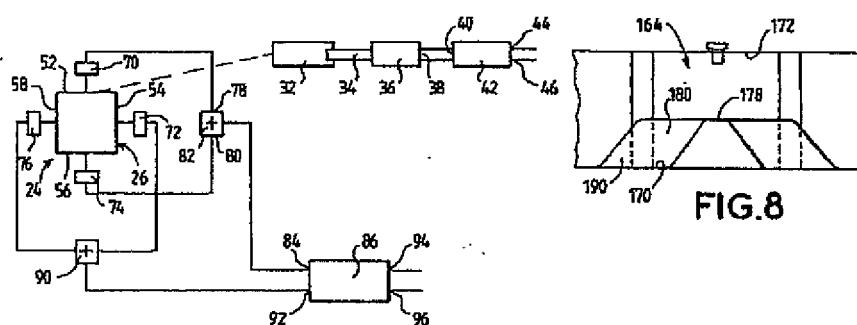


FIG.1

【図2】



【図8】

FIG.8

【図3】

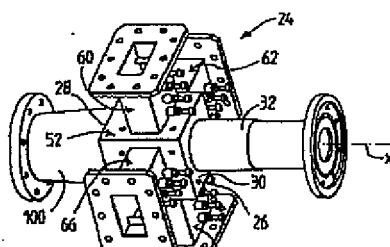


FIG.3

FIG.2

【図4】

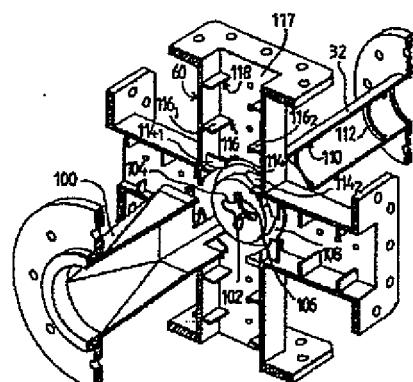


FIG.4

【図6】

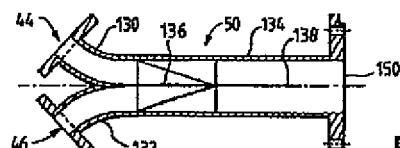


FIG.6

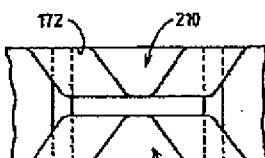


FIG.9

【図5】

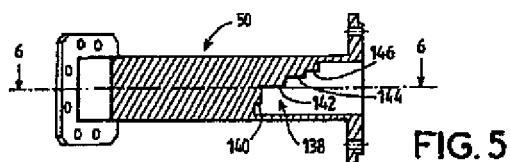


FIG. 5

【図7】

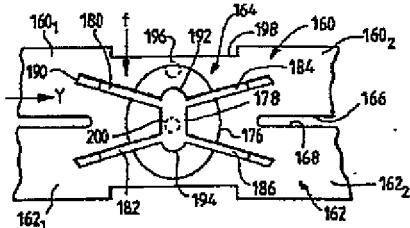


FIG. 7

フロントページの続き

(51) Int. Cl. 6 識別記号
H 04 B 1/38

(72)発明者 ジャン-ピエール・プロ
フランス国、06100・ニース、アブニユ・
ペシカール・186、ラルカディ (番地なし)

F I
H 04 B 1/38

(72)発明者 ジエラール・エストラード
フランス国、31600・ミユレ、シユマン・
ドウ・レルミタージュ・27
(72)発明者 ジャン-クロード・クリュション
フランス国、95570・ブツフマン、リュ・
ネ、28